

流行唄かえ歌一枚摺貼り込み帖 紹介

(大津絵節摺り物貼込帖 甲雑一七三)

梅花女子大学 萩田 清

一、はじめに

幕末・明治初期の流行唄替え歌の一枚摺類、三十枚が一括して大阪府立中之島図書館に所蔵されることになった。この種の一枚摺に関心をもつ利用者の一人として、喜ばしいかぎりである。筆者はかつて「上方の咄家と天保・幕末期の流行唄(下)―一枚摺を中心に―」(『芸能史研究』九十三号、1986.4)を執筆した。肥田皓三氏のご教示に負うところ大であったが、そこにその時点で確認できた咄家の作・調になる一枚摺の一覧を掲げておいた。大阪府立中之島図書館蔵のものでは、「大阪役者の追福面影」「浪花趣味はりませ帳」「保古帖」から抽出して使用した。

あれから二十年以上が経過し、その間ぼつりぼつりと、ご教示があったり、自身入手したり、古書目録で見たりして、一覧の増補が必要となっていた。改稿して本にまとめようと思っていた矢先に、今回の一枚摺群の出現である。

筆者の関心は流行唄そのものより、そこに詠み込まれている芸能、殊に咄家や役者にある。その視点からとなるが、全三十枚を内容で分類しながら、簡略に紹介させていただきたい。あわせて、その資料価値について、私見を述べたいと思う。

二、咄家の流行唄替え歌

咄家の関与しているものが、七枚ある。桂文枝が三枚、笑福亭松鶴が二枚、林家菊丸が二枚である。文枝のものからみてみよう。

(3) 中の芝居にて 坂東彦三郎法界坊 大津画ぶし 桂文枝 作 芳滝画

縦二六・二糎×横一八・八糎 多色摺

明治二年八月中の芝居(座本・実川延吉)、「隅田川続佛」において、五代目坂東彦三郎の法界坊の霊が葱売りとなって、すっぽんから登場する図を描き、歌詞もそれを詠み込む。年代が明瞭なので、この桂文枝は初代文枝ということになる。前記拙稿では、この人の前に文枝がいたことを述べたが、混乱を避けるために通説による。この人の弟子に文枝の四天王と呼ばれる咄家が出て、今日の上方落語につながる大元を築いた人である。文枝作のこの種の一枚摺はこれまで多くは見ておらず、殊に貴重なも

のといえよう。画師の芳滝は一養亭（笹木）芳滝、幕末から明治にかけて、夥しい役者絵を残した浮世絵師である。拙稿「芳滝画」「三府役者顔似世大見立」をめぐって……芳滝・大見立・八尾善……」（『浮世絵芸術』146号）や「大阪の浮世絵師―一養亭芳滝」（『懐徳』75号）でも触れたように、彼は当時の歌舞伎界と深く関わっていた。

(2) 五代目嵐璃寛 大津画ぶし 桂文枝 戯作
画師名なし

縦一九・〇糎×横二五・六糎 多色摺

慶応三年八月中の芝居（座本・実川延吉）、「色競秋七草」「播州皿屋舗」。皿を前にした、嵐璃寛のお菊が描かれる。なお、璃寛をここでは「五代目」とするが、『歌舞伎俳優名跡一覽』（国立劇場調査資料課編）でいう「四代目」。二代目嵐吉三郎の俳名璃寛を璃寛の初代として数えるか否かの問題であり、こうした例は多い。明治前期の大阪の歌舞伎界に、二代目尾上多見蔵とともに君臨した役者の、襲名時の摺物といえよう。

(1) 中の芝居にて 二人道成寺 大津画ぶし 桂文枝 調 午の初春雪の朝 芳

滝酔筆

縦二六・〇×横三七・四糎 多色摺

明治三年正月中の芝居（座本・実川延吉）、「色競二人道成寺」の嵐璃寛・坂東彦三郎を凧に描く。「東京で染た紫（彦三郎）と。浪花に咲し橘（璃寛）と。色香くらぶる道成寺」と詠み込む。「酔筆」とはいいながら芳滝の絵も豪華で、紹介する三十枚の中随一の一枚摺であろう。

次に笑福亭松鶴のものを見よう。松鶴作の二枚は、どちらも「尽し物」の戯作で、内容から年代推定は困難と思われる。初代松鶴の没年は慶応二年説と三年説があり、ちょうどこの種の一枚摺の最盛期にあたる。二代目も唄本を残しており、厳密に言えば初代の作か二代目の作か判別しがたいが、「二代目」と断っていないものは、初代と判断してよいかと思っている。松鶴の「大津絵ぶし」は有名で、比較的多数現存している（拙稿「松鶴戯作一枚摺の流行唄」「藝能懇話」十一号）。

(8) 半尽し 大都絵ぶし 笑福亭松鶴 作 貞廣



縦一八・二糎×横二五・〇糎 多色摺

浮世絵師貞廣が描く、麦飯むぎいねを掻き込む職人風の男の絵が、興味深い。年代が明確ではないが、「大津絵ふし」の流行期は安政以降であり、初代貞廣の活躍した嘉永より後のため、二代目貞廣と思われる。

(7) たゞぬつくし 大津絵ふし 笑福亭松鶴 作 画師名なし

縦一八・二糎×横二四・七糎 多色摺

画師不明ながら、絵は「関取二代勝負付」の角力取り秋津島が鬼が嶽に打擲される場面を描いている。

次は林家菊丸の二枚である。大阪林屋の祖を『落語系図』は「林屋玉蘭」「林屋蘭丸」とするが、江戸時代の資料に玉蘭・蘭丸の名を見出していない。江戸から下った林屋正三を祖するのが妥当と思われる(拙稿「上方の咄家と天保・幕末期の流行唄(上)」―薄物の唄本より―) (『芸能史研究』九十二号、1986.1)、この一派は明治初年まで流行唄に多く名を残しており、菊丸もその一人であった。

(14) しゃうぎ 大津絵ふし 林家菊丸 戯作 画師名なし

縦一八・二糎×横二四・八糎 多色摺 天紅

娼妓と将棋を掛けて、駒の名を詠み込みながら、娼妓遊びの様を歌ったもの。図は客と遊女が向かい合って飲食する図。上端には天紅が入れている。

(4) 中の芝居 大津画ふし 林家菊丸 戯作 赤根屋半七 実川延三郎 かさや三

かつ 藤川友吉 廣信画

縦一八・六糎×横二五・二糎 多色摺

文久三年(1863)十月中の芝居(座本・嵐吉万寿)「三勝櫛赤根色指」。延三郎は初代。今日に繋がる上方歌舞伎の和事の芸に大きな足跡を残した人である。のちに二代目実川額十郎を名乗ったが、明治維新を待たずに慶応三年(1867)に没した。友吉は三代目。大阪の女形役者の大きな名跡を継いだ人。文久四年には荻野扇女と改名し、明治四年(1871)に没した。浮世絵師廣信は初代。延三郎と友吉を一人ずつ大首に描いた小さな絵で、後年のブロマイドのような形となっている。

三、見世物引札の流行唄替え歌

見世物興行の引札として作られたと思われる流行唄一枚摺の一群がある。前出の拙稿では咄家が関係したものに限定したが、それでも桂鶴助や林家正楽のものがあった。以下の

二枚は咄家の関与はないが、明らかにその類のものである。

(12) 時計 大津ゑぶし 上孫作 太夫元 坂田次郎紀盛房 画師名なし

縦一八・二糎×横二五・〇糎 四色摺 天紅

明治五年(1872)か。『近來年代記』明治五年の条の「難波新地において見せ物」の中に

「○時計細工 是は時計のぜんまい細工にして、人形はたらき、又は鳥のなきこゑをきかす也」と出てくる。見世物資料として貴重と思われるので、歌詞を写しておく(漢字を宛て、清濁を正し読点を補つて、読みやすくしている。引用は以下同じ)。「南紀より浪花津へ、初めて今度とんできて、ほうほけきやうも片詞、時計を知らず庭鳥や、御客をこゝへ呼子鳥、夜から札を買をく鳥を、楽人たちが打寄て、太鼓を叩く、笙の笛、音楽の遊人のからくり、はたらきを、見物溝の側で、南地も言わずとほめまする」

(5) なんば新地五十二次生人形大当り 大津面ぶし 細工人 肥後住人 安本亀八 口上あまからや 作

縦一七・七糎×横二四・七糎 三色摺 天紅

明治三年(1870)正月二日より、難波新地登加久屋敷跡(『近來年代記』)。亀八は松本喜三郎とともに、生人形師(のちの彫刻家に繋がる)として著名。口上のあまからやも、見世物にはしばしば名を見せる。見世物興行に際しては、辻ビラ(辻番附)・錦絵の類が多くの情報を与えてくれる一級の資料として知られているが、この種の引札も捨てがたい。

四、店舗引札の流行唄替え歌

店の引札かと思われるものがある。行楽客を招き寄せようとするものとして、見世物の引札と狙いは同じであろう。

光 (11) 大津ゑぶし 梅ちうのかへ歌 大阪地藏坂上本町東南 新梅やしき 福喜園 廣



縦一七・四糎×横二二・四糎 三色摺

新梅屋敷福喜園の宣伝で、大津絵ぶしの「梅川忠兵衛」の文句の作り替えである。中にセリフ、地唄十二月の替え歌を挟み込んでおり、廣光（不詳）による薄紅・薄墨の淡彩をほどこした福喜園の入り口が描かれた、凝った一枚である。

五、大津絵ぶし・よしこの等

本来、歌の一枚摺なのであるから、広告などの明確な目的を持っているわけではなく、粹人による各種の歌詞の摺物も出されている。

(6) 大はやり 大都画ぶし (八陣亭) 合ノ亭歌鳴 述

縦一二・五糎×横一七・六糎 三色摺

絵はないが匡郭を竹で、中に桜の花びらを散らしたものだ。役者や浄瑠璃太夫などの名寄せとなっている。作者はこの種の歌詞の作者としてしばしば見かける「合ノ亭歌鳴」である。歌詞の最後の「八陣亭」が筆者には未詳であり、あるいは前項の引札の性格を持ったものかもしれない。芸能研究者としては詠み込まれた名寄せが興味深い。

「当時流行るもの並べて言わふなら。斬髪、しゃつぽん、人力車、くるま役者は右団治に葉村屋、坂彦か。延若、福助、翫雀、駒之助。神社に説教、日々新聞。浄瑠璃、山四郎、鞍に春太夫。女太夫は八重八、はま吉に、新内は馬蝶に美津太夫、芸妓は房鶴。

ひら辰、小六に丸万で。ちう／＼太夫に八幡藪、やわたしらずへみちくる／＼ひと八陣亭」

(30) □景一派竹尽 よしこ□ どどいつ集 なにわの栄竹亭 合ノ亭作

縦一七・八糎×横二四糎 多色摺

破損で判読できない所は、□とした。よしこのは都々逸と同じ七七七五の形式で、新作の歌詞を作ることが流行し、結社もできた。これは社中の摺物ではないかと思われる。「栄竹亭」は未詳。題は「竹」で、当時著名の役者にちなんだ内容となっており、上部にそれぞれの役者の紋が描かれている。末尾に「合ノ亭」の名があり、合ノ亭歌鳴が宗匠の立場にあったものか。

(29) 風流十二月 よしこの 画師名なし

縦一八・七糎×横二五・七糎 多色摺

双六風に十二齣に区切られて、十二月にちなんだよしこのと絵が描かれる。例えば正月は「そんなに凝らずと冷めないよふに松と竹との末長く」に門松の前に立つ礼者が

描かれる。題の下に本来画師・板元が記されるはずであるが、空白となっている。

(28) 「役者名入りよしこの」

縦一七・四糎×横二〇・五糎 三色摺

役者を詠み込んだよしこのの歌詞の上に、その役者の紋が赤と緑で描かれている。文字は墨で摺物としては、あっさりとしている。作者名もない。役者は福助(三代目中村福助)・多見蔵(二代目尾上多見蔵)・葉村屋(四代目嵐璃寛)・高島屋(初代市川右団治)。最後は生人形で、紋のところ、的と矢を描いている。横が短く、右端の題名が断ち切られたものか。

(22) そうだんべい かへうた

縦一八・七糎×横二五・六糎 二色摺

「そうだんべい」節の替え歌。文字は墨。黄色で上部に雲形、下部に楓を散らす。作者名なし。一番のみ記すと「腰にぶら／＼花や紅葉に酔ふたがよい、こちや楽しんでゐるわいな、瓢箪べ／＼」。

(20) 淀の川瀬 かゑうた 「浪花名所」

縦一三・二糎×横一九・三糎 二色摺

端唄「淀の川瀬」の替え歌で、内容は浪花名所となっている。文字は墨。題名の下に赤で嵐吉三郎の紋(吉の字亀甲)を大きく描く。「浪花名所のな、景気は見事、引ゐてさわぐ、やれ屋形船、清き流れを汲む川竹に、めぐる大社へみんな／＼参詣、咲いた桜の宮、春先群集、夏の涼みは鍋島浜よ、こふした所は大湊、よき／＼／＼／＼／＼よ
い／＼／＼／＼」

六、世相風刺かえ歌

残る十四枚は、替え文句、替え歌で明治維新前後の世相風刺の歌となっている。幕府や倒幕派を茶化するものだけに、作者名など入れないのが普通で、多くは紙の上に赤い線、天紅が入れてあり、遊女らが客に宛てた私信を偽装しているように見える。詳しく調べたこととはないが、筆者も二十枚ほど所蔵しており、現存するものも多いと思われる。替え歌の形をとった風聞を載せた瓦版(事件報道)という性格のものである。

(18) 浄るり 三かつ替もんく

縦一八・八糎×横二五・七糎 三色摺(合羽摺) 天紅

「艶容女舞衣」酒屋の段、お園のくどきをもじって、幕府を皮肉る。文字は藍色。女

性の三味線弾きの横に大夫の図。合羽摺の彩色、画師名なし。

(17) 松づくし かへ歌 正若画

縦一八・〇糎×横二四・八糎 多色摺 天紅

右下に松の木、尉と姥、朝日が色摺で描かれ、一見めでたい「松づくし」の歌詞の摺物のように見える。内容は、徳川批判。画師の正若(あるいは正居と読むか)は、(26) (29) にも出てくるが、不明。

(16) ふじのかへ歌

縦一七・八糎×横二四・二糎 藍単色摺

絵は左上に富士、右下に松原。文字と同じ藍摺。「伏見騒動は伊予の松山、先手は会津桑名か一橋、みんな敗軍して舟にうち乗り、逃げるは備中の松山か、コレヤコンヤ」。

(15) げほうのはしごづり 大津絵ぶし

縦一七・五糎×横二二・七糎 二色摺 天紅

天紅と桜の花びらを散らして、文字は藍色。「けいき(慶喜)さん恥を売る」で始まる危ない文句。もちろん作者名はない。

(13) 大津画ぶし

縦一七・四糎×横二四・〇糎 藍単色摺 天紅

右下に三味線を弾く女性の姿が描かれるが、文字とともに藍の一色。最後の文句は「徳川(皮)が敗れる(破れる)のも一つ「一橋」は罰(撥)の技」。

(10) 新板大津ぶし 御所の御固の御門をば恋じにたとへていはふなら

縦一八・九糎×横二五・六糎 緑単色摺 天紅

右下に客と遊女の座敷の様子を、文字と同じ緑色で描いている。遊女の気持ちを詠みながら御所警護の様子を嵌め込む。

(19) 朝見日記 宿やのたん かへ文句

縦一八・〇糎×横二三・五糎 多色摺(合羽摺) 天紅

右下の合羽摺の絵は「生写朝顔話」宿屋の段の深雪、駒沢次郎左衛門、岩代多喜太を描く。色摺の絵だけを見ると、「朝顔日記」の摺物のようであるが、文句はかなりきわどい。「またも都を騒がして、出でゝは見たが大坂も、けいき(景気・慶喜)が悪く追い出され、行く所さへ定めなく、思ひ思へばこの負け戦、巧む会津も水の泡、桑名、松山、



大滝も引くにも引かれずともづれに、悲し／＼も渚の船、あてどもなけねどとり乗りて、命ばかりは逃れ行く」。

(27) 伊与ぶし 伊勢宇治はしのかへ歌

縦一八・七糰×二四・七糰 藍単色摺 天紅

右には伊勢神宮と宇治橋投げ銭の様を、文字と同じ藍色で描く。幕府軍敗軍の様を詠む。

(26) 十日ゑひす かへうた 正若画

縦一七・七糰×横二三・七糰 二色摺 天紅

右下に十日戎の福笹と鯛、蝶二羽を描く。「鳥羽伏見の戦へは、桑名はすぐに萩かます、困りて板倉淀堤、伊予松会津の戦いに、大坂を離れる一ツ橋」。

(25) 都新とりをひ 慶四辰とし 雲龍堂 作

縦一五・二糰×横二二・七糰 二色摺 天紅

松竹梅を模様として散らす。この種のものとしては年号・作者名（もちろん何者かわからない）を記すのは珍しい。「世上や満足治まりて……先、朝廷の御治世をばん／＼歳といのります、御代も栄て御目出たや」。鳥追い歌をもじって、官軍勝利を祝っている。

(24) しんぱん とりをひかへもんく

縦一八・二糰×横二二・九糰 墨単色摺

墨色の匡郭の中に、文字のみ。内容は26と重なるが、文句はまったく別。

(23) 春さめ つくりかへ

縦一八・八糰×横二五・七糰 二色摺 天紅

文字は墨、薄紅の桜の花びらを散らす。端唄「春雨」の替え歌。「東路へすつくり抜ける慶喜（振り仮名は「のりよし」）も月日の匂ふ將軍の旗に戦ひ朝敵や、この世の騒ぎ一人して憎や逃れた身は一つ、会津桑名とあわす胸、御代をいまだ気儘になるならば、サアおふやくたいじやないかいな、トウド謀反が顕れた」。

(21) かわ竹 かへ歌 正若画

縦一七・六糰×横二三・六糰 多色摺（合羽摺・吹き付け） 正若画 天紅

右下に池の鴛鴦の図。文字は墨。端唄「川竹」の替え歌。「都に浮名を残す、一橋、会津桑名に松山も、萩とくつわに追い寄せられ、別れに城を焼きはらひ、東行きとは馬鹿らしや」

(9) 梅川忠兵衛 大津絵ぶし つくりかへ

縦一八・四糎×横二四・六糎 二色摺 天紅

文字は墨、赤で花びらを散らす。梅川忠兵衛の大津絵節の替え文句。「大坂を立ち出で、異国の姿が眼にたゞば、蒸気船に身を隠し、頃は霜月十二日、二十日余りに工みし計略も、うつて変はつてへちやもくれ、今より大事の宮様や、お旗まで出さしましたも会津ゆへ、さぞ板倉けれどもお腹を切て、異国へ行ってじやと諦め一つ橋」